

引退議員に
聞く

議員立法の児童虐待防止法が2000年に成立した。衆院青少年問題特別委員会の委員長を務めていた。

「児童福祉法の範囲で対応できません。当初、厚生省幹部はけんもほろろ。委員会の理事会に呼んでも「要りません」の一点張りだった。断念も頭をかすめた。

与野党の理事で児童養護施設を訪ねた。「児童虐待と法律名や条文に明記してほしい」「どんな暴力も性被害も全て虐待だと分かるようにしてください」。職員から悲痛な叫びを聞いた。

「各党の案を取り下げ、協力できる部分だけでもまとめないか」。視察後に各党に提案した。党が違っても現場を見て当事者の声を聞けばまとまれる。政界のひとつの真理を見た。子どもに関わる政策は超党派で実現させる機運が高まった。17年度に支給が始まった給付型奨学金にも思い入れ



元幹事長代理 公明・富田茂之氏

政治家こそ異端であれ

が強かった。関わり始めたのは1999年の自民党と連立を組む直前だ。自民党と奨学金拡充を協議した。「子どもに予算をつけても1票にもならないよ」。ある議員のひと言にがくぜんとした。

授業料を払えず中退する私立高校の生徒が増え、公明党の地方議員に相談が相次いでいた。少し時間がたち、同じ議員に言われた。

「俺にも要望が届いたよ。よほどの事態なんだろう」

自民、公明両党が文書で「新しい奨学金制度を創設する」と確認した。給付型奨学金の実現の足がかりとなった。弱き者、貧しき者に光をあてることができた。

若い政治家は他党との交流を深めてほしい。政治は不安定だ。いつでも野党になりうる。個人の信頼関係が最終的に政治を動かす。

公明党議員の多くは同じことしか言わない。私は異論ばかり唱えてきた。常に異端児と煙たがられた。

自分の頭で考えて政治理念や得意分野を確立しないと政治家である意味はない。決定事項の説明係になっても仕方ない。時代は激変する。今の異端は将来の異端とは限らない。世の中を先導する政治家こそ異端であれ。

とみた・しげゆき 一橋大法卒。弁護士。93年衆院選で初当選。法務副大臣、財務副大臣、党幹事長代理など歴任。衆院当選8回。68歳。